

論文

大学入試制度がもたらす遡及効果

——受験生の主観的成長感から何が見えるか

西郡 大*

*佐賀大学アドミッションセンター

The backwash effect of University admission system: What can you see from university hopefuls having a subjective sense of growth?

Dai Nishigori *

* Admissions Center, Saga University

The purpose of this research was to examine the effect caused by experience which high school students have prepared for the university admission. As a result, I confirmed that the more accomplishment they have, the more positive they think effect of examination study. I knew that they got not only the ability for "endurance", "concentration", "thinking" but also "thanks", "human interaction", "cooperativeness" throughout the experience of studying for admission. Moreover, I investigated how these abilities or skills had been created throughout their experience by interviewing their teachers.

Keywords : backwash effect, university admission, experience of studying for admission, career guidance

キーワード : 遡及効果, 大学入試, 受験勉強, 進路指導

1. はじめに

戦後の大学入学者選抜（以下、「大学入試」と略記）を紐解くと、「過度の受験競争」として問題にされた時期（中央教育審議会,1997）もあったが、今日では、「大学入試の選抜機能の低下が高等学校における大学進学希望者の学習意欲の喚起や指導に影響し・・・(中略)・・・教育の質を保証する観点から、システムとして高等学校と大学との接続の在り方を見直すことが重要である」（中央教育審議会,2008）と大学入試を取り巻く環境は大きく変化した。その背景の1つに、「大学全入時代」とも称される18歳人口の減少が進む中での大学等進学率（平成22年度学校基本調査では54.3%）の上昇がもたらした構造的な問題があることは、多くの人々が認識するようになってきたところである。

*〒840-8502 佐賀県佐賀市本庄町1番地 佐賀大学アドミッションセンター

Correspondence concerning this article should be sent to: Admissions Center, Saga University, 1 Honjo-machi, Saga-city, Saga,840-8502, JAPAN.

E-mail: nisigori@cc.saga-u.ac.jp

その一方で、学力偏重の選抜方法を改め、評価方法の多様化、評価尺度の多元化が行政によって推進されてきたことにより、国公立立を問わず各大学の入試制度は非常に多様かつ複雑化している。そのため、同一学部・学科等には、同一の選抜方法ではなく、様々な選抜方法を経て入学してきた学生が混在しているのが実態と言えよう。

このように大学入試を取り巻く構造は大きく変化しているものの、平成 22 年度入試の新型インフルエンザに対する大学の対応や平成 23 年度入試における入試問題ネット投稿事件など大学入試に対する社会的な関心は高く、その影響力が受験当事者にとって依然として大きいことは多くの人が共感できることと言える。また、明治以降の入試制度の変遷を整理した木村・倉元（2006）は、「日本型大学入試制度の三原則」の 1 つに大学入試が高校以下の教育を歪めないように配慮しなければならないという「下級学校への悪影響の排除」を挙げ、高等学校教育にもたらす大学入試制度の影響力の大きさについて指摘している。高等学校の教育を大学受験準備教育に偏らせてしまう「受験シフト」などは、この代表的な例と言えるだろう。

大学入試が持つ影響力について、少し異なる観点から見れば、「遡及効果（backwash effect）」として捉え直すことができる（倉元,2005）。遡及効果とは、「テストの形式や内容が教育内容を逆に規定してしまう現象」（村上,2001）である。遡及効果には正負の側面があり、「受験戦争」や「受験シフト」がもたらす教育的な弊害などが該当し、先に述べた「下級学校への悪影響」は負の側面が強調されたものと言える。一方、「大学進学をめぐる競争が入学者全体の学力水準を維持・向上させ、高等学校教育の質の保証や大学教育の入口の質を保証する機能を一定程度果たしてきたことは否定できない」と中教審答申（2008）で総括されるように、大学入試が学力水準の維持に一定の役割を果たしてきたことはマクロレベルでの正の側面として考えられる。さらには過去に出題された良質な入試問題が教育現場で教材として活かされている現実を考慮すれば、ミクロレベルにおける正の側面とも言えるだろう。

こうした遡及効果は、大学入試を取り巻く環境が変化するにしたがい、その影響力の性質も変容してくることが考えられる。学力偏重の試験制度がもたらす弊害を反省し、推薦入試や AO 入試といった学力検査以外の入試方法が推進されてきた一方で、『分数ができない大学生』（岡部・戸瀬・西村,1999）に代表されるように大学生の学力低下も問題にされてきた。さらに近年では、「推薦入試や AO 入試における外形的・客観的な基準が乏しく、事実上の学力不問となるなど、本来の趣旨と異なった運用がされているのではないかと懸念も

示されている」(中教審答申,2008)と大学全入時代における多様な入試制度の問題点も直接的に指摘されるようになった。そこで本研究では、現在の大学入試制度下において、どのような波及効果が存在するのかを検討するために、大学入試がもたらす受験当事者への教育的効果に注目して、その実態を明らかにする。

2. 受験勉強に対する受験生の意識構造

筆者は、2008年3月に東北、東海地域における3校の高等学校3年生を対象に、「高校生の大学入試に関する受け止め方の調査」を行った。本調査は交流のある進路指導教員を通じて依頼したものである。調査対象の高校は各地域におけるいわゆる「進学校」であり、多くの生徒が国公立大学を第一志望としている。入試の可否結果は各自の入試制度に対する肯定感・否定感を強く規定することが確認されており(西郡・木村・倉元, 2007)、可否結果の要因を取り除くことが回答者の純粋な意見であると解釈できる。したがって、調査時期を一般入試の前期日程終了後かつ合格発表前に設定した。返却された回答数は961件、有効回答数は917件であった。

本研究では、同調査の一部の項目を利用し、受験勉強に対する受験生の意見構造を分析した。具体的には、「受験勉強なんてものは、将来、全く役に立たないと思う」という質問項目に対する意見構造である。本項目は、「そう思わない(1点)」「あまりそう思わない(2点)」「どちらとも言えない(3点)」「少しそう思う(4点)」「そう思う(5点)」の5件法で尋ねている。各選択項目に対する人数の内訳をみると、「そう思わない」「あまりそう思わない」と回答する生徒は約70%を占めており、多くの生徒が受験勉強を肯定的に捉えている傾向が示された(表1)。

表1. 「受験勉強なんてものは、将来、全く役に立たないと思う」に対する回答

質問項目	人数	割合(%)
そう思わない	320	34.9
あまりそう思わない	310	33.8
どちらとも言えない	201	21.9
少しそう思う	61	6.7
そう思う	25	2.7
合計	917	100

表 2. 受験勉強の達成感からみた受験勉強の将来への有効性認識

項目	やり切っていない群<I> (n=301) M(SD)	どちらとも言えない群<II> (n=281) M(SD)	やり切った群<III> (n=335) M(SD)	主効果 F値	多重比較 (Tukey法)
受験なんでもものは、将来、全く役に立たないと思う	2.25(1.06)	2.17(1.04)	1.87(.98)	12.26***	I = II > III

次に、「受験勉強は、十分にやり切ったと思う」（5件法）という項目の回答を利用して、「そう思わない」「あまりそう思わない」の回答者を「やり切っていない群（I群）」（301名）、「どちらとも言えない」の回答者を「どちらとも言えない群（II群）」（281名）、「少しそう思う」「そう思う」の回答者を「やり切った群（III群）」（335名）とし、受験勉強に対する彼らの達成感を3群に分けた。そして、各群における、「受験勉強なんでもものは、将来、全く役に立たないと思う」という項目への回答の平均値を分散分析によって比較することで、どのような特徴がみられるかを検証した。その結果、主効果が確認され、Tukey法による多重比較を行ったところ、「やり切った群」の平均点のみが有意に低いことが示された(表2)。つまり、受験勉強に対する達成感が強い者ほど、受験勉強を将来的に役立つ経験として認識しているのである。この結果は、志望校合格に向けた頑張りや達成感が、受験勉強に対する肯定的な認識に繋がっていることを表している。「受験勉強が将来的に役立つ」という認識を「受験勉強を通して、将来的に役立つものを身に付けた」と解釈するならば、受験勉強の「教育的効果」とも捉えることが可能であり、大学入試がもたらす正の遡及効果の一面が示されていると考えることができる。

3. 受験経験を通して成長できたと感じるもの

3.1. 成長できたと感じるもの：自由記述から得られた成長内容

前節では、受験勉強を一生懸命に頑張り、達成感を味わった受験生は、受験勉強の経験を肯定的に認識する傾向が確認された。本節では、彼らが受験経験を通して、一体どのようなものを身に付けたと感じているのかについてアプローチする。

筆者は、2009年度のS大学（地方国立大学で中規模程度の総合大学）学部新入生に対して実施したアンケートの一部に、「受験勉強や受験対策など受験生という経験を通して、何か成長できたと感じるものがありますか。『ある』とした場合は、その内容についても具体的にお書きください。」という項目を加え、受験を終えたばかりの新入生の意見を調査した（以降、受験勉強や受験

対策など受験生として経験したものを「受験経験」と総称する)。

アンケート調査の回答者は 1,263 名 (回収率 91.5%) である。「受験経験を通して成長できたものがある」と回答した者は 789 名 (62.4%)、「受験経験を通して成長できたものはない」と回答した者は 415 名 (33%)、無回答が 59 名 (4.6%) であった。また、「成長したとを感じるものがある」とした回答者の自由記述は 690 件であった。

受験経験を通して得られた具体的な成長感を抽出するために、自由記述によって得られた各回答を吟味し、類似した意味内容をカテゴリー化した結果、「忍耐力」「集中力」「自信」「自制心」「思考力」「協調性」「感謝の心」「人間性」「対人関係」「積極性」「計画性」「情報収集力」「表現力」「勉強の習慣」という 14 のカテゴリーが作成された。

3. 2. 成長できたと感じるもの: 定量的な分析

3.1 節では、受験経験を通してどのようなものが成長できたと感じるかについて自由記述分析によって 14 のカテゴリーを抽出することができたが、各カテゴリーに対する気持ちの強弱までは把握することができなかった。そこで、翌年 (2010 年度) に実施された S 大学の調査項目を、上記 14 カテゴリーに「成長したものは無い」という意味の「特になし」という項目を加えた合計 15 の項目からなる選択方式に改修した。質問文は、「受験勉強や受験対策など受験生という経験を通して成長できたと感じるものを、次の中から 3 つまで選び、気持ちの強い順に、[回答欄] へ数字をご記入ください。なお、3 つ未満の場合は、あるものだけで結構です」とし、気持ちの強い順に 3 つ選択させた。

回答者が選択したカテゴリーには、最も気持ちの強いものから 3 点、2 点、1 点と点数を付与し、各カテゴリーの合計得点を用いた。合計得点が高いカテゴリーは、受験経験を通して成長したと受験生によって強く意識されたものであり、反対に合計得点小さいカテゴリーは、強くは意識されなかったカテゴリーと解釈できる。

表 3 は、各カテゴリーの合計得点の高いものから並べたものである。最も得点が高かったのは「忍耐力」であり、次に「集中力」が続く。やや点差が空いて 3 つ目に「感謝の心」といったカテゴリーが挙げられた。

次に、性別、志望強度 (第一志望か第一志望以外)、現浪別、入試方法、学部系の属性別に合計点を算出した (表 4~8)。なお、各属性における回答者数が異なるため、属性間での得点比較は意味を持たない (例えば、男子と女子の得点そのものを比較すること)。したがって、各属性におけるカテゴリーの得

点順位の比較をもって特徴として解釈した。それぞれの特徴について以下にまとめる。

表 3. 各カテゴリーの合計得点

カテゴリー	合計得点
忍耐力	1713
集中力	1154
感謝の心	767
思考力	594
勉強の習慣	523
自信	391
計画性	364
自制心	268
特になし	253
情報収集力	208
対人関係	205
積極性	204
人間性	191
協調性	189
表現力	114

まず、性別では、男子で「忍耐力」の次に「集中力」「思考力」と続くが、女子では、「感謝の心」が2番目に挙げられている。次に、S大学に対する志望強度では、上位カテゴリーに大きな違いは見受けられないが、中位以降にやや違いがみられ、「積極性」の順位が第一志望は9番目に挙げられているものの、第一志望以外では13番目であった。現浪別では、現役生の方が「感謝の心」が3番目と浪人生より高く、下位カテゴリーでは、浪人生における「人間性」の順位の方が現役生よりも高い。入試方法別では、「推薦入試」において特徴がみられ、「感謝の心」が2番目、「情報収集力」が5番目と他の入試方法よりも順位が高く、「特になし」の順位が最も低い。学部系別にみると特に大きな違いはみられないが、理系学部において「特になし」が中位であった。

一方、どの属性にも共通して支持されているのが「忍耐力」や「集中力」であった。前年度調査の具体的な自由記述例を挙げるならば、「忍耐力」は「我慢強さ」や「最後まで頑張ること」などが該当し、「集中力」では「集中して勉強する」などが含まれる。受験勉強が志望校に合格するために自分を律しながら目標に向かって集中して努力するという行為を必要とすることは多くの

人が経験的に理解できることであり、その一般的な感覚が反映された結果だとみることができる。大学全入時代とも言われる中、競争倍率は低下してきたとは言え、忍耐力や集中力を伴う受験勉強という行為は欠かせないのだろう。

また、「忍耐力」や「集中力」と同じように支持されているのが「感謝の心」である。同様に前年度の自由記述から得られた具体例としては「周りの人の支えの大切さ、ありがたさ」「感謝を伝えられるようになった」といったものが含まれる。このように受験経験を通して身についたものには「忍耐力」「集中力」「思考力」といった認知的側面だけでなく、「感謝の心」「対人関係」「協調性」などの対人関係を通して得られたと考えられる情動的な側面も挙げられる。つまり、受験経験は、入試で少しでも高得点を取るための学力を身に付けるとい個人修練的なものだけでなく、個人内に限定されない、彼らを取り巻く学習環境や人間関係がもたらす副次的な効果も内包していることが示された。

表 4. 性別にみた合計得点

男子	得点	女子	得点
忍耐力	939	忍耐力	744
集中力	724	感謝の心	434
思考力	346	集中力	399
感謝の心	325	思考力	237
勉強の習慣	296	勉強の習慣	222
自信	227	自信	152
計画性	223	計画性	132
特になし	165	自制心	102
自制心	163	積極性	101
協調性	115	情報収集力	98
対人関係	114	対人関係	91
人間性	109	特になし	85
情報収集力	100	表現力	77
積極性	94	人間性	74
表現力	36	協調性	71

表 5. 志望強度別にみた合計得点

第一志望	得点	第一志望以外	得点
忍耐力	931	忍耐力	716
集中力	618	集中力	483
感謝の心	459	感謝の心	281
思考力	318	勉強の習慣	262
勉強の習慣	242	思考力	252
自信	235	自信	143
計画性	214	計画性	139
自制心	142	自制心	116
積極性	123	特になし	116
特になし	122	対人関係	96
協調性	115	人間性	80
情報収集力	114	情報収集力	79
人間性	101	積極性	76
対人関係	95	協調性	69
表現力	81	表現力	26

表 6. 現浪別にみた合計得点

現役	得点	浪人	得点
忍耐力	1456	忍耐力	224
集中力	979	集中力	144
感謝の心	666	思考力	101
思考力	482	感謝の心	92
勉強の習慣	446	勉強の習慣	72
自信	323	自信	54
計画性	307	計画性	48
自制心	225	自制心	40
特になし	209	特になし	38
対人関係	180	人間性	32
情報収集力	170	情報収集力	28
積極性	169	積極性	26
協調性	164	対人関係	25
人間性	151	協調性	22
表現力	104	表現力	9

表 7. 入試方法別にみた合計得点

前期日程	得点	推薦入試	得点	後期日程	得点
忍耐力	1137	忍耐力	279	忍耐力	256
集中力	761	感謝の心	185	集中力	178
感謝の心	446	集中力	174	感謝の心	127
思考力	392	思考力	93	思考力	94
勉強の習慣	374	情報収集力	57	勉強の習慣	88
自信	259	勉強の習慣	56	自信	61
計画性	246	計画性	56	計画性	50
特になし	192	自信	55	特になし	45
自制心	191	積極性	54	自制心	45
協調性	131	表現力	47	対人関係	40
対人関係	126	対人関係	39	情報収集力	35
人間性	121	協調性	33	人間性	32
積極性	110	自制心	29	積極性	26
情報収集力	106	人間性	27	協調性	21
表現力	54	特になし	7	表現力	12

表 8. 学部系別にみた合計得点

文系学部	得点	理系学部	得点	医学系学部	得点
忍耐力	672	忍耐力	843	忍耐力	198
集中力	409	集中力	634	集中力	111
感謝の心	362	感謝の心	308	感謝の心	97
思考力	235	思考力	306	思考力	53
勉強の習慣	196	勉強の習慣	290	勉強の習慣	37
自信	167	自信	191	情報収集力	35
計画性	151	計画性	179	計画性	34
自制心	109	特になし	166	自信	33
対人関係	102	自制心	137	人間性	28
積極性	89	情報収集力	112	表現力	28
協調性	77	協調性	92	積極性	26
人間性	75	積極性	89	自制心	22
特になし	71	人間性	88	対人関係	22
情報収集力	61	対人関係	81	協調性	20
表現力	57	表現力	29	特になし	16

4. 高校生活のどのような場面を通して成長感は得られたのか

これまで受験生の立場から受験経験を通して得られた成長感をみてきたが、こうした認識は、具体的にどのような場面を通して得られたのであろうか。何かしらの経験があったからこそ、成長感を感じることに繋がっていることが考えられるため、受験生を指導する高校教員の立場から具体的な高校生活の場面にアプローチした。

筆者の所属部署では、業務の1つとして年間に約200(のべ数)の高校を訪問している。この高校訪問は、各校の進路指導担当者との面談を目的としたものであり、大学の広報活動や進路指導の実情などを聞き取ることを主としている。こうした機会を利用し、「受験勉強(経験)がもたらす効果・影響力に関する調査」として、面談に応じてくれた教員を対象に聞き取り調査を実施した。実施時期は2010年の11月～12月であり、九州地区(福岡県、佐賀県、熊本県、長崎県)の高校90校を訪問した。訪問高校は各地域のトップ校から中堅校に該当する普通科高校が中心であり、S大学への志願者が一定数以上いる高校である。面談時間や先方の都合を考慮して協力が得られる高校のみを本調査の対象とした。

調査方法は、2節と3節で行った分析結果をまとめた資料を提示しながら概要を説明し、3節で示した各カテゴリーが、高校生活のどのような具体的な場面を通して醸成されているのかについて意見を求めた。特に、「感謝の心」「対

人関係」「協調性」といった情動的側面を持つカテゴリーについて詳しく尋ねた。なお、回答者には、一般的な意見ではなく個人的な経験に基づく具体的な場面を求めている。有効回答は46校の教員から得ることができた。

4. 1. 個別指導を要する受験対策がもたらすもの

推薦入試やAO入試といった特別入試は、学力検査を主とする一般入試と違って、志望理由書や自己推薦書といった応募書類に加え、小論文や面接試験などを組み合わせた評価方法を採用する大学が多い。そのため、授業形式で複数の生徒を指導することが可能な教科指導とは異なり、個別指導が必要になるのが一般的である。例えば、小論文や志望理由書などの添削は、授業等で作文指導を行っている国語教員や、社会問題等をテーマとして扱う公民の教員などが中心となることもあるが、一般的に3年生を担当する教員全体でチームを組んで対応することが多い。しかしながら、個別指導の対象者が極端に多い場合や、特別な知識や特殊なスキル等が必要となる個別指導の場合、当該学年団の教員だけでは対応が難しい場合もある。また、推薦入試やAO入試には面接試験が課されるのが一般的である。面接指導を行うためには相応の面接者側の経験や緊張感を持たせるような雰囲気で行うことが重要となるため、校長や教頭が指導に当たることもあるという。つまり、学年を越えた全校体制での個別指導が実施されている高校も少なからず存在するのである。

こうした特別入試に対する個別指導では、生徒一人に対して複数の教員が指導にあたるという量的なサポートが必要になるだけではない。近年では、高校長の推薦が不要であったり、調査書の評定平均が出願要件として課されないような入試制度が多くなってきたため、希望さえすれば誰でも出願できてしまうという実体がある。こうした状況は、十分な志望動機があるわけではなく、さらには進学意欲も必ずしも高くない生徒が指導の対象となることを意味している。ある教員は、「受験準備の初期段階では、自分が行きたい大学の志望動機さえ言えなくて泣き出す生徒もおり、教員が指導に当たらなければ前に進めない」と述べていたが、この意見に集約されるように、志望動機や進学意欲等を主として評価することを打ち出している入試方法を受験したいと希望する生徒自身が、志望動機や入学後にやりたい事を言えないというケースが多く、進路指導現場で見られるのである。

以上のように、推薦入試やAO入試といった特別入試を希望する生徒たちの能力や資質が多岐に渡るため、それぞれに応じた個別指導が求められる。教員側の投入コストが極めて大きくなることは言うまでもない。中には、「日曜日

や夜中でも FAX や E-mail を利用して相談や添削指導を行う教員もいる」とのことであり、こうした献身的な指導を享受する生徒にとって、「感謝の心」が醸成されるのは自然のことだと考えられる。実際、指導を受けた生徒たちのほとんどは、合否の結果に関わらず、お世話になった教師たちへ感謝の気持ちを心から伝えるようであり、表7で示された「推薦入試」における「感謝の心」の順位が上位にあるのも納得できる結果だといえよう。

4. 2. 「情報収集力」が求められる特別入試

推薦入試において「情報収集力」が相対的に上位にある（表7）。「推薦入試やAO入試は『情報戦』の側面を持つ」と表現する教員もおり、「情報収集力」が受験対策として重要な位置を占めていることがうかがわれる。学力検査を中心とする一般入試であれば、テスト得点という、誰もが理解しやすい一元的な尺度で評価されるため、少しでもテストで良い得点を取るために教科学習を徹底するという明確な対策がとられる。

それに対して、面接試験、書類審査、小論文といった評価方法は、テストで測る「学力」という明確な基準というよりも、大学が求めているもの、それに対する受験生側の考え方など、相対的な関係性の中で考慮すべき性格のものと考えてることができる。例えば、志望理由書や面接試験において一般的に問われる志望動機や入学後に勉強したいことを表現するためには、大学が求める意図（アドミッションポリシーなど）を十分に理解し、受験生自身の性格や志望動機を考慮しながら、少しでも外的を外さない妥当な応答が必要になるのである。また、小論文では、受験する学部の特성에 応じて出題されるトピックや文献も様々である。そのため、過去の問題ではどのような分野あるいは範囲から出題されているかを分析し、その範囲に近い時事問題や社会事象および文献に目を通しておくことが受験対策として必要となることが考えられる。

以上のことを考慮すれば、「情報収集」が合格可能性を少しでも高めるために不可欠となるのは当然のことである。情報収集の手段としては、各大学が公表している大学案内や広報誌等の冊子あるいはホームページといった広報媒体をはじめ、オープンキャンパスや各地域で実施される進学説明会といった機会も利用されている。実際、「推薦入試やAO入試の受験を考えている生徒には、オープンキャンパスなどの参加を勧めている」と述べる教員は多い。また、オープンキャンパスや進学説明会等の催し物に関して、推薦入試やAO入試受験者の多くは他の入試区分に比べて、参加率が高いという報告もある（村松ら,2008；吉村・木村,2010）。

さらに、受験生にとって欲しい情報は各大学が公表する情報だけでなく、合格の確率を少しでも高めるためのテクニカルな情報も含まれる。例えば、面接試験の実施形態は個人面接なのか集団面接なのか、実施時間はどのくらいなのか、どのような質問や口頭試問がなされるのか、さらには評価のポイントはどこなのかといった情報である。これらの情報を公開する大学も一部にあるが、公表していないところの方が一般的であろう。しかし、実際には、受験産業等によって過去の受験生が調査され、公表されていない各大学の情報も、ある程度整理された形で受験当事者は知ることができる。こうした情報をしっかり集めて受験対策を練るか、何も知らないで受験対策を練るかは、その対策内容に大きな違いをもたらす可能性は否定できない。先に触れたように、特別入試が情報戦の性質を持つのは、こうした側面によるところが大きい。

ただし、推薦入試やAO入試の受験対策のために収集した情報が、単に合格可能性を高めるためだけのものなのかということ、必ずしもそれだけではないことが示唆される。近年では、キャリア教育の一環として、大学での学業および研究や大学卒業後の進路などに関する情報を生徒に集めさせ、「なぜ大学に進学するのか」、「どのような理由で志望大学を決めたのか」といったことを考えさせたり、これまでの自分を振り返ることで自分がどのような人間で、今後、どのような人間になりたいのかを考えさせる「自己分析」を行っている高校も存在する。仮に、受験対策が目的で収集してきた情報だとしても、それらの情報を自らの資質や能力と重ね合わせて熟慮する機会となるのであれば、彼らのキャリア形成を担うという意味では、キャリア教育の側面を内包していると考えることができる。特別入試の受験対策を自分を見つめ直す機会だと捉えれば、積極的な情報収集は、彼らの視野を広げるための材料となっているのかもしれない。

4. 3. 合格実績を左右するクラスの雰囲気

進路指導の現場では、「受験（勉強）は団体戦」という言葉がよく用いられる。これは大学進学を目指す生徒、そうでない生徒に関わらずクラスが一丸となって入試の全日程が終了するまでの期間を戦い抜くという姿勢を示した言葉である。そして、受験までの期間を団体戦として戦い抜くために必要となるのが「クラスの雰囲気」というわけである。実際、「クラスの雰囲気の良し悪しが合格実績に大きく影響した」という経験を持つ教員がほとんどであった。では、雰囲気の「良いクラス」と「悪いクラス」とは、具体的にどのようなケースが当てはまるのであろうか。それぞれの具体例について以下にまとめる。

出席率の変化

一般的に、センター試験が終了して1月末くらいから自宅学習期間に入る高校は多い。雰囲気が良いとされるクラスでは、同期間に移行しても欠席者が少ないようである。「一人も欠けることなく授業できることが受験に向けた『原動力』」と表現する教員もおり、国公立大学の入試日程（特に前期日程）までは、クラス全員で頑張り抜こうとする姿勢を保つことが全体のモチベーションに繋がっていると推察できる。

一方、同期間に入って出席率が極端に落ちてしまいうクラスは雰囲気が良くないとされる。自分の受験に必要な科目や催し物を「無駄な時間」と捉えるような個人的合理性が前面に出てくるにつれて欠席者が多くなるようだ。こうした雰囲気が蔓延することで、「欠席者が多くなるにつれ、生徒全体の心に穴が空くような気持ちになる」とも表現されるように、チームとして受験に挑もうとする雰囲気が壊されてしまうのである。

ただし、こうした傾向は全ての高校に当てはまるわけではない。市街地のいわゆるトップ校の一部には、学校に登校せず塾や予備校を利用して粛々と受験勉強をこなし、自分の志望校にしっかり合格していく生徒も多いとされる。しかし、こうしたケースは稀であり、一般的な高校では、十分に学力が備わっていない生徒が学校を欠席し、自宅あるいは塾や予備校で個人的に頑張ってみてもあまり良い結果は得られないことが多く、むしろ同じ学力レベルの生徒同士を比較したら、学校に出席して頑張っているの方が良い結果を得ることの方が多いようである。

クラスの雰囲気をいかに作るか

生徒にとって周囲の雰囲気によってもたらされる影響力はとても大きい。例えば、「友達の背中を見ながら自分は一人じゃないと感じる」「同じクラスの生徒で、同じ大学の学部や学科を受験するケースは稀であるため、同一のものをめぐって争う競争相手というよりも、同じ境遇を戦い抜く“戦友”のようなもの」といった意見からも、生徒同士のライバル心が上手く機能すればその相乗効果は計り知れないものと思われる。相乗効果が上手く機能している例として、「朝の朝礼のときから、クラスの雰囲気が今までと違う」「休み時間や放課後に生徒たちが協力し合いながら勉強するようになる」「それまで全く質問しなかった生徒たちも、友人同士で誘い合って職員室などへ質問に来るようになる」といったものが挙げられる。

こうした生徒の主体性が喚起されるような雰囲気を作るために、教師は一種の仕掛けをすることもある。例えば、体育祭が盛んな高校では、体育祭に向けてクラスが自然と団結していくことが多く、その過程で結束した団結力の勢いをそのまま受験勉強に注ぎ込めるように仕向けるといったことや、クラス運営において影響力を持つキーマンとなる生徒を選定し、その生徒を焚きつけて学習意欲を喚起させることで、周囲の生徒を感化していくというやり方もあるようだ。また、正月に直前講習を実施する高校では、出席してきた生徒に「食べたら合格するカレー」を振舞うなど生徒のモチベーションと団結力を高めるような企画を実施しているところもある。なお、生徒たちの雰囲気だけでなく、教員同士のチームワークの良し悪しも生徒に影響することが多く、3学年の教師および進路指導室等が団結し、学年全体を盛り上げていけるかどうか、良い雰囲気を作るための1つのポイントとなっているようである。

逆に、雰囲気の悪いクラスでは、生徒の意識がバラバラで共通の目標に向かって頑張ろうという姿勢はみられない。坦々と自分のペースで頑張る生徒もいれば、周囲に流されて集中できない生徒もいる。もちろん、こうした状況では、生徒同士の切磋琢磨から得られる相乗効果は期待できず、キーマンを焚きつけてもほとんど効果がない。このような状況が最後まで続けば、合格実績も満足なものにならない。そうなる前に何かしらの手を打つことが教師の重要な役目となっているようである。

早期合格者の周囲への配慮

推薦入試やAO入試で合格が決定する場合、早い生徒は秋口には進路が決まる。合格を手にするまで授業や課外活動を一生懸命にやっていた生徒も進路が決定することで、緊張感から開放され、授業に対する姿勢やその他の活動に対する気持ちも緩んでしまうのは十分に考えられることである。生徒によっては、調子に乗って自分勝手な行動をとる者や自動車学校に通うために学校を欠席する者など、他の生徒のやる気を著しく削ぐ場合がある。もちろん、こうした生徒が多くなるにつれ、クラスの雰囲気が急速に悪くなっていくのは言うまでもない。

そのため、“団体戦”で受験勉強に挑もうとする高校にとって、早期合格者に対する指導は極めて重要なものとなる。具体的には、「他の生徒の迷惑にならないように行動しなさい」「他の生徒の見本となるように振舞いなさい」といった直接的な指導をすることもあれば、授業や補習への参加、模試やセンター試験の受験までを条件として、推薦入試やAO入試の受験を許可する高校も

ある。また、「クラス全員合格という目標を徹底的に認識させることで、各自が何をすべきかを自然と考えさせる」というようにクラス運営の中で間接的に意識付けさせる場合もある。その一方で、「早く決まった生徒が反対に浮いてしまうことがあるためそのサポートも重要」という意見もあり、早期合格者に対する指導の内実は、各高校の置かれている状況によって様々である。

ところで、こうした早期合格者を抱える教育現場でも「団体戦」としてのチームワークが上手く機能すれば、早期合格者は、一般入試受験を目指す生徒たちのサポーターとして、影ながら彼らを支える役目を担うようになる。例えば、「早期に決まった生徒が一般入試受験組のために、歴代総理大臣の写真と名前を教室の壁に貼って覚えられるようにして応援をする」「センター試験を受験しない早期合格組がセンター試験会場に早朝から集まり、センター試験受験組のために場所取りをする」「早期合格者が“お守り”を作って一般入試組に渡す」といったようなものである。3.2節で挙げられたカテゴリーに「感謝の心」「対人関係」「協調性」といったものが含まれる背景には、上記のような場面が影響しているのかもしれない。受験を終えた生徒が受験を控えている生徒に配慮しながら、全員が合格できるように自然と助け合う雰囲気生まれることが、受験勉強を団体戦として挑む醍醐味の1つとなっているのであろう。

4. 4. 受験経験を通して成長する生徒たち

最近の高校生の性質として、「定期試験や模擬試験などの結果に影響を受けやすく、志望校の判定が悪いとすぐにランクを下げてしまう」とか、「特定の教科や科目の成績が伸び悩むような場合、その教科や科目が課されない大学や学部・学科等を安易に選んでしまう」など、安きに流れる生徒が増えてきていることを指摘する教員は少なくない。こうした生徒をできる限り少なくするために、最後まで志望校を諦めない姿勢や学習すべき教科や科目を捨てない雰囲気を作るなど、各高校は苦心しながらも様々な工夫で乗り越えようとしている。

時期としては、高校3年生の夏休みから秋口にかけてが大きな山場であり、ここを乗り越えることが1つの目標となる。この時期をしっかりと乗り越え、センター試験を受験する1月頃になると生徒たちは学力的にも精神的にも大きく成長することが多いようである。さらに、センター試験終了後から国公立大学の入試が始まる2月下旬までの約1ヶ月間、多くの高校では、志望大学の過去問やそれに類似した演習問題を解いていくような実践的な対策に時間が当てられるのが一般的である。ある教員は、「この時期の生徒たちの著しい成長をみると教えるのが楽しくて仕方ない」と評しており、この短期間に生徒たち

の学力は一層飛躍する。

一方、国公立大学を目指す生徒の中には、前期日程で不合格になってしまう者もいる。これらの生徒は、後期日程を受験するのが一般的であるが、後期日程を受験する大学を第一志望ではない「滑り止め」として受験する生徒もいるだろうし、不合格というショックと、後期日程までの時間的な制約の中で、気持ちをうまく切り替えて受験勉強に励むことのできない生徒も多い。しかし、どんなに受験産業等の予想判定が悪くても第一志望の大学を最後まで諦めずに逆転を信じて頑張り、合格を手にする生徒は少なからず存在する。こうした生徒の受験経験を通して得られた成長感について、本研究のデータから示すことはできないが、少なくとも、最後まで頑張り抜いたことが志望校合格という結果と結びついたという事実を考慮すれば、自己効力感 (self-efficacy) につながる何かしらの成長がもたらされている可能性もあるだろう。

多くの高校において、高校3年生が本当の意味で受験生としての心構えができるのは、3年生への進級時ではなく、部活動をしている生徒は高校最後の大会が終わってから、体育祭や学園祭が盛んな高校ではそれらのイベントが終わってからというように、あるきっかけを境に意識の転換が図られる。こうした転換期から入試本番までの期間を生徒たちの学力面および精神面が大きく成長できるチャンスと考えるならば、同期間を如何に有効に活かすかという視点は、今後の高校と大学の接続を考えていく上での1つの視点とも言えるのではないだろうか。

5. まとめ

一般的に大学入試について議論される場合、「大学入試に向けた過酷な受験競争が高校教育を歪める」とか、「大学入試の選抜機能低下に伴い大学生の基礎学力や学習意欲が低下している」というように、大学入試制度の構造的な側面に焦点が当てられた、教育政策に通ずる要素について議論されることが多い。制度的な側面は多くの人々の目に留まりやすい問題であり、我が国の将来を担う人材を育成するための政策を議論していく上でも不可欠な論点だといえる。

しかし本研究では、こうした側面とは異なる観点から、大学入試がもたらす遡及効果、特に正の側面に注目し、受験生は受験経験を通してどのように成長するのかについて検討した。その結果、大学入試に向けた受験勉強が、単なる志望校合格に向けた取り組みに留まらず、生徒の生活様式や行動、さらにはクラス運営をも巻き込んだ「大学入試文化」ともいえる慣習が根付いていることが明らかとなった。これらのことは、履修要件や教育効果等を意識して作成さ

れた通常のカリキュラムとは異なり、大学入試制度が存在することで高校の学習現場に自然発生的に生じた「隠れたカリキュラム (hidden curriculum)」と解釈できるだろう。

多くの若者が、一定期間に同じような目標を目指して物事に取り組むような状況は、現代社会では唯一大学入試だけと考える教師も少なくない。ある教員は、「大学入試は、現代の高校生にとっての“通過儀礼”のようなもの」と表現していた。逆に言えば、大学入試が突然無くなることは、多くの高校生が耐え忍びながらも何かに向けて努力する原動力を無くすことを意味しており、学習に向かう意欲を大きく減退させかねないということを示している。

近年、「高大接続テスト (仮称)」に代表されるように、高校と大学の接続に関する議論が注目されるようになってきた。同接続テストでは、従来の大学入試制度自体の根本的な改革も視野に入れた高大接続のあり方が想定されている(北海道大学,2010)。仮に、こうした動きによって、今までにない抜本的な制度改革が行われるとすれば、改善される部分も大きいだろうが、同時に教育現場において、これまで培われてきた側面、特に、「隠れたカリキュラム」のように、人々が通常では認識しにくい教育的効果も失われかねないことも想定しておく必要がある。本研究で示された知見は、九州地区の生徒および高校教員を対象に分析したという点では限定的なものであり、一般化するまでには至らないが、少なくとも現実的な場面における大学入試がもたらす教育的効果の一端を示すことができたのではないかと考える。これらの視点が今後の議論の一助となれば幸いである。

〔付記〕

本研究は、平成 21～22 年度科学研究費補助金(研究活動スタート支援、課題番号 21830083)の成果の一部である。

参考文献

- 中央教育審議会「21世紀を展望した我が国の教育の在り方について（第二次答申）」,文部省,1997.
- 中央教育審議会「学士課程教育の構築に向けて（答申）」,文部科学省,2008.
- 北海道大学「高等学校段階の学力を客観的に把握・活用できる新たな仕組みに関する報告調査研究（報告書）」.文部科学省委託事業,2010.
- 木村拓也・倉元直樹「戦後大学入学者選抜制度の変遷と東北大学のAO入試」『東北大学高等教育開発推進センター紀要』1,2006,15-27.
- 倉元直樹「大学入試と高校教育 -議論の前提を問い直す-」,上野健爾・岡部恒治[編].『こんな入試になぜできない 大学入試の「数学」の虚像と実像』.日本評論社,2005,141-161.
- 西郡大・木村拓也・倉元直樹「東北大学のAO入試はどう見られているのか? -2000~2006年度学部新入学者アンケート調査を基に-」『東北大学高等教育開発推進センター紀要』2,2007,23-36.
- 文部科学省「学校基本調査平成22年度（確定値）」,2010.
- 岡部恒治・戸瀬信之・西村和雄[編]『分数ができない大学生』.東洋経済新報社,1999.
- 村上隆「第2言語としての日本語能力テストの開発 -一般的な問題と固有の問題-」『計測と制御』40,576-580.
- 村松毅・寺下榮・田中勝「『対面型』入試広報の効果測定に関する調査<総括>」『大学入試研究ジャーナル』18,2008,1-6.
- 吉村宰・木村拓也「新入生を対象とした入試広報活動に関する調査」『大学入試研究ジャーナル』20,2010,209-216.